【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　人間・社会科学専攻
フィールドリサーチ領域
園部　すみ

【論　　文　　題　　目】
現代日本語の従属節選択と複文の類型について

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

園部（旧姓　塩入）氏の学位論文『現代日本語の従属節選択と複文の類型について』においては、現代日本語における「従属節の主題化」という現象の考察を通じ、従来の複文研究において議論されてきた、「従属節の階層構造と文の類型」という２つの観点の統合が主な目的とされている。また、中国語話者による対訳付きデータの活用･分析を通し､「日本語学習者の従属節選択における有効な概念」の提出・検証、日本語教育への有益な観点の提出も目標とされている。

序章では、研究の背景と動機・目的・意義について述べられている。

第１部では、本研究に関わる先行研究―文の階層構造と文の類型に関する研究―が概観され、氏の文法記述の立場が明らかにされている。ここでは、従属節の階層構造と文の類型、さらに学習者の母語を考慮した研究に関連する先行研究が概観された後、氏の研究の立場が述べられている。

第２部では、今回、氏が行なった中国語話者を対象とした調査を含め、本研究で主に用いられたデータの概要と調査方法が述べられ、調査の結果及び考察が行なわれている。そこでは、中国語話者による従属節選択に関する誤用の傾向が明らかにされている。

第３部では､第１部の理論的支柱である､文の階層構造と文の類型との関係が､個々の従属節―「て」節・時間節･「の/こと」節･「とは」節―とそれぞれの主文述語の用法にどのように反映しているかが考察されている。特に、主題用法の「の/こと」節と事態評価の述語の取る従属節については、コーパスの用例を通して、その従属節の取り方が階層構造及び複文の類型に強く関わっていることの指摘がなされている。最後に、以上の考察のまとめとして、文の類型を階層構造と関係付けながら複文に適応するという新たな観点が提出されるとともに、従属節の主題化という言語現象が､「は」を伴う顕在的なものと「は」を伴わない潜在的なものの２種に大別されることが指摘されている。そして、本研究が、日本語学においては、言語類型論的な日本語の特徴や、認知意味論の意味解釈に関する議論にも有意義な知見を与えること、また、日本語教育においては、中級以上の学習者の文法学習に有益な観点を提出できることが主張されている。

複文という大きな枠組みの中における論文全体の構成や構築の問題、アンケートの分析方法、ピンインを含む中国語表記の問題、中国語との対照研究などの課題も見受けられるが、日本語学研究において、従来、単文を中心として進められてきた文の類型という言語普遍的な観点を複文にも拡張・考察し、複文の類型が従属節の階層構造とも関わっているという指摘、また、事態評価の述語の従属節自体が主題的な役割を果たし属性叙述文を形成するという指摘は氏論文の示す固有の新知見である。さらに、日本語の従属節選択の際に中国語話者の誤用の多い用法に関し有効な記述説明が示されている点は、今後の中国語話者の日本語教育に少なからず貢献していくものと判断される。

多くの資料に当たって調査を行なうなど実証的に結論を導いている点も評価に値するものであり、博士（文学）の学位に十分に相応しいものと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

平成 25 年 1 月 18 日（金）午前９時半から午前１０時半の間、文学部小会議室に於いて審査委員６名参加の下に最終口頭試験を実施した。最初に園部(旧姓　塩入)氏が論文の概要について説明し、引き続いて各審査委員による質疑応答が行われた。園部氏はこれらについて適切に応答した。

また平成 25 年 1 月 27 日(日)午前 10 時から 11 時の間､全学教育棟 E107 教室に於いて氏の学位論文公開発表会が開催された。参加者からの質問について適切に応答した。

以上により、本審査委員会は申請論文が学位を授与するに足るものであり、かつ長年に渡る研究歴と教育経験に裏打ちされた十分な研究能力を確認した。

よって、本審査委員会は、最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査　福澤　清
委員　千島　英一
委員　堀畑　正臣
委員　千田　俊太郎
委員　坂元　昌樹
委員　隈元　貞広